

短歌雜詠

つどひよる兒等が唄ふ聲さへも冴えて聞ゆる秋は悲しき
病院の窓より見ゆる遠山は吾が古郷の山に似たるも
病院の灯ともし頃の寂しさを過ごすによしなく遠山を見る
夕くれにうすもやかゝる遠山をみつめてあれば涙こぼるゝ
待ちわびし静臥の椅子のとゞきけり荷造りとく間ももどかしく思ふ
のびのびと椅子にいねみしこゝろよさ病もとくに癒ゆる心地す
とく來ねば間にあはぬとぞかこちしにはや二ヶ月もいねて暮しぬ
病室の窓ぎは近き葡萄だな色美しくふさふさとなる
あをあをと繁る葡萄の木の下にこの暑き日を過して見たし
まのあたり見るが如くに思はるゝ美しかりし姉の姿を
朝な夕な吾をなぐさめしコスモスも散り果てにけり吾が枕べに

秋々秋のさなかの青ぞらを病床にありて仰ぎ見るかな
秋の空照ると思へばまた曇るわがいたづきのそのの如くに
をちこちの山の景色をながめつゝ心はいつしか病を思ふ
思ひても甲斐なきことゝ思へどもまた思ひてはみるいたづきの身は
今日もまたなすこともなく過ぎにけり生きて甲斐なきわが身なれども
朝まだき寢覺めの床の淋しきに工場の笛の悲しくきこゆ
我もまた姉のあとおひ行くならんつかし父のまします國へ
病む母にせめて一ことなぐさめのふみかゝんとて涙流しぬ
母こひし母こひしとて今日もまた一日せんなく過しけるかな
すみわたる高きみ空に白雲の靜かに動く初冬の朝
冬の夜半すき間をもれる寒風の身にしみわたりて人のこひしき
冬の夜半酒造るなる倉人のしじま破りて起き出でにけり
さらさらとなるは木の葉か降る雪かぬくきねやにてルンペンを思ふ
病人のねられぬ夜半は殊更に身の行く末を思ひぬるかな

雀二羽軒端にありてなにごとか首ふりふりて語るがに見ゆ
繰返し繰り返しても見あかぬはやさしき君のみづくきのあと
久にして君に逢ひたるうれしきにも云はんとて夢さめにけり
冬の日春を待ち居り春來れば若葉の頃を待ちて暮しぬ
うら、けき春の光に梅の花匂ひ床しく咲き出でにけり
心なく人のいひける言の葉も病みぬる身にはひしとこたえぬ
なかなかにすみうき世とは知りながらなほ生きたしと願ひぬるかな
我が病いて歸らんその日をば待ち詫ぶるとて君はのたまふ
やぶかげの彼岸櫻も春の陽にちらりほらりと笑み初めにけり
學びやにあらたに入る日近づきて体格検査今日ありときく

(百合子の通學姿、遂に見ず逝く)

春來れば病いゆるとそれのみを樂しみ居るに春は過ぎゆく
青々とのびたる麥の穂をつみてむぎ笛吹きし頃のなつかし
あれこれと思ふにつけても我がいのち今たゝるゝは苦しかりけり

みな人のいと安らげくねしづもれるその幾夜さを我なきあかす
汽車過ぎしあとはことさらしじまりて寒さ一しほ身にしみわたる
青丹よし奈良の都に遊びしははや二とせの昔となりぬ
姑上のいつにかはらぬみ心をいたつきてまたしみじみおもふ
過ぎし日の三人の旅の樂しさを思ひ出しぬ秋の夕べに
母上よとく歸り來よと云ふ兒等のことを思へば死なれざりけり
死ぬこともならじなかなかに死なれじな吾を待つ兒の二人もあれば
このまゝに命終れば何としてやさしき姑の御恩報ぜん
あるときは死なんとぞ思ひあるときは生きんとぞ思ふ
長き夜を目覺めてあれば病人はおのづと兒等の行く末を思ふ
兒等のこと思ひてあればいつしかに涙あふれて枕ぬらしぬ
幼な兒よまさきくあれと明け暮れを母は病床に祈り重ねつ
久にして家に歸れば三つの子は母忘れしか顔つくつくと見る
母親の乳の味さへしみじみと知らで過ぎしぬ吾がいとし兒は

このたよりインクのあとに姑上の心づくしのありありと見ゆ
久なれば乳の味さへ忘れしか乳房いぢりてわが顔を見る
姑上のましまさばこそ何時までも心安けくやまひ養ふ
姑上に慈悲のみ心なかりせばかくも安けき日は送れじな
病む兒等のみとりに姑は食事さへとり給はずときくぞかなしき
あれこれと思ふにつけても我が命今たゝるゝは苦しかりけり
健かに生ひたちし兒を見せんとて姑ははるばる伴ひ來たまふ
久にして逢ひにし兒等の顔みればわれいたづきの身をば忘るゝ
待ちわびしあふ瀬短かく喜びはまたゝくひまにすぎゆきにけり
いとし兒の乗りたる汽車を高き家の廊下にたちてしばし見送る
いとし兒の去りにしあとはひしひしと心のおくに淋しきの湧く
あさましう病ほうけたる身なれども未來はうれし花のうてなに
むつかしき知慧も理屈もいらぬゆゑそのまゝ來よと彌陀はのたまふ
みほとけの御慈悲しみじみ味へばそのひと時は病忘れぬ

つみ深き身に味はへとみ佛は病てう機にあはせたまへり

○左の数首はわが母の病中の妻によせるもの

おさな兒を遠くはなれて病む母の心根くみて涙こぼるゝ
静まりてすやすやねむる孫のかほ母に見せたく夜毎に思ふ
何事も因縁ごとゝあきらめて心静かに病いやせよ
まゝならぬ世のならひとは知りながらまたわきあがる愚痴の煩惱
煩惱のしげれる林のその中に時をりかをる光明の花

○余が妻によせる中より

妻は臥す我また病みぬ今日の日も兒等は出でしかひそまりにけり
ひとりゐるのわびしきまゝに筆とりてわれのこのごろ忘れんとぞ思ふ

樹の間も朝の光の心地よしいたづく身をもふと忘れしむ

すみ渡る大空めがけ我魂のとびゆく心地うら淋しけれ

さち願ふ妻のたよりに今日もまた心のくもり五月雨のふる

いたづきの妻のたよりはよむごとにひめしことどもきく心地する

吾子は母にわれはわが家を見守らん君よ静かに病癒やせよ

幾夜かねねむられじとわれに云ふわれも同じくそでぬらす日のあり

さびしきは母の乳房をふくみえずねむりそめたる吾子を見ると

やすやすと寝むれる坊のかほ見れば母に似通へり病むわが妻に

和坊よそのいたづらを汝が母に見せたく思ふ汝が父なれば